

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎 REIMEI 明 報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0027号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成18年7月25日

大御心を踏み躪ること勿れ！陛下を政治利用すること勿れ！

富田朝彦・元宮内庁長官(故人)が、昭和天皇のご発言を書きとめたとされるメモが日経新聞によって18年ぶりに明らかになったが、何故この時期に、経済紙である日経が・・・と考えると、背景にある政治的な意図が浮き彫りになってくる。日経の報道に端を発して、ふだん皇室を敬う気持ちなど欠片も無いサヨクメディアが此処を先途とばかりに疑わしいメモを取り上げて「天皇もA級戦犯合祀に反対なのだから靖国参拝はやめろ！」と言わんばかりの報道をしている。連中はついこの間まで「象徴天皇に政治発言する権利は無いし、聞くつもりも無い」と主張していたのが掌を返したように天皇陛下を政治利用しようとしている。先般皇室典範が論議されていた時に、三笠宮寛仁親王殿下のご発言に対して「皇族に政治的発言権は無い」と言い、朝日新聞にいたっては「黙れ！」と言わんばかりの報道をしていた。一体この腐れメディアのダブルスタンダードは何なのだろうか。メモの出現から10日が経ち、改めてこのメモの信憑性に疑問を持たざるを得なくなった。

メモの中の「私」が何故昭和天皇と断言できるのか。合祀に大反対し、メモに書いてあるようなことを主張していた徳川義寛侍従長(当時)の発言ではないのか。

常に国民と共に歩まれ、国民のことを心配され、国民の意思を大事にしてこられた昭和天皇が、4000万人もの署名と全会一致の国会決議で戦犯指定を解除された人々に対して、そのようなことを本当に述べられたのだろうか。「大東亜戦争の責任は全て自分にある」とマッカーサーに語られた昭和天皇が、臣下に責任を押し付けるようなことを発言されたのだろうか。

メモには「だから私はあれ以来参拝していない」とあるが、昭和天皇が最後に参拝されたのが昭和50年、所謂A級戦犯が合祀されたのが昭和53年、合祀が原因だとするならば辻褄が合わないのではないのか。

「松平の子の今の宮司がどう考えたのか」、「筑波は慎重に対処してくれたと聞いたが」これらのご発言が、合祀された昭和53年ならまだしも、10年後の昭和63年4月28日、如何にも不自然ではないか。

陛下が戦犯合祀に御心を痛められていたならば、毎年A級戦犯も追悼の対象となっている全国戦没者追悼式典に参列され、お言葉を述べられているのは何故か。

「白取」を「白鳥」と間違えるのはありそうなことだが、メモでは「白鳥」を「白取」と間違えているが、普通こんな間違いをするだろうか。

朝日が出版している「週刊AERA7月31日号」には、富田夫人は輪ゴムで纏めたメモを日経の記者に手渡したとある。ではメモが手帳に貼り付けてあったのは何故か。朝日が日経の捏造を暴いたこととなる。

少なくとも以上の疑問点が解消されなければメディアの報道を事実とは認め難い。日経はメモを全て公開し、国民の疑問に明確に答えるべきである。百歩譲って、先帝陛下が本当にここまではっきりと仰せになられたとするならば、ご発言を無視した議論は成り立ち難いと思う。同時に私にはこれを論じるのは、余りにも重いものを感じるが、前述したようにメモの信憑性に疑問がある以上、この道を歩む一人として議論を避けて通る訳にはいかない。仮に先帝陛下が大東亜戦争における「日本国民に対する戦争責任」として、メモにあるようにご判断なされてお話になられたとするならば、大御心に従うことは当然のことである。しかし、もともと靖国参拝に否定的な輩が、個人的なメモ、それも限りなく疑わしいものをこれ見よがしに取り上げ、支那の内政干渉に屈する形で靖国神社参拝反対を唱えるならば、断固阻止しなければならない。

私は昭和天皇ご夫妻の写真が飾ってある家で生まれ、幼い頃より私の一日は、両陛下の写真を拝み、先祖の仏壇に掌を合わせることから始まった。明治生まれの厳格な父から、天皇陛下のお蔭で日本は守られてきたと教えられて育った。写真でしかお目にかかったことのない昭和様の御姿を実際に拝見したのは、亡父に連れられて行った小学校4年か5年の冬の蔵前国技館であった。結びの一番が終わり、昭和様がお帰りになる時、観客が一斉に立ち上がり「天皇陛下万歳！」と何度も何度も繰り返したと、手を振って観客にお応えになられた昭和様の御姿は、今でも私の脳裏に消えることなく残っている。大喪の礼の時は、人知れず涙を流した。私はこれまでの人生の中で何度か主義や主張を変えたことを否定しない。だがしかし、この道を歩き始めてから一貫して変わらないものがある・・・それは日本国民は「赤子(天子様の子供)」であり、私は「天皇信者」であるということだ。故に今回の日経の報道が事実ならば、私自身のこれまでの持論の修正を余儀なくされるかも知れない。しかし、何度も言うが私にはどうしても疑問に思えてならない。何よりも国民と共に歩まれ、喜怒哀楽を共にされた天皇陛下の御言葉としては到底信じ難いものがある。靖国神社が所謂戦犯を合祀するに当たっては、おそらく天皇陛下の御許可を受けている筈である。受けていなかったというのなら、宮内庁が天皇陛下にお伺いを立てないで行ったという疑惑も生ずる。それを後で取り繕うために、この元宮内庁長官がそのようなメモを残したということも十分考えられることだ。このメモの真偽のほどが定かではない限り、世論が分祀論や国立追悼施設建立に傾斜していくことを身を挺して防がねばならない。そうしなければ靖国に眠る御英霊に合わせる顔が無い。

編集人//戸出蒼流

北のひめゆり・・・貴方は、この9人の乙女たちの辛く哀しい実話をご存知ですか？



北海道稚内市の小高い丘の上に樺太を見据えるかのように「氷雪の門」が立っている。傍らには慰霊碑があり次の9人の名が記されている。

高石	ミキ(25才)	可 ^{よしがたに} 香谷シゲ(25才)
志賀	晴代(23才)	吉田八重子(22才)
伊藤	千恵(22才)	高城 淑子(20才)
沢田	きみ(20才)	渡辺 照(18才)
松橋	ミドリ(18才)	

家を出るとき母が門まで見送って「気をつけてね。」と声を掛けた。いつもはそんなことしないのに、と思って可香谷シゲは振り返って見た。母は心細げにシゲを見つめていた。「大丈夫よ。」シゲは微笑を返し、自転車のペダルを踏み込む。空は晴れ渡っていた。爽やかな夏の風がシゲの髪をなびかせた。

昭和20年8月19日、樺太南端にある真岡市の真岡電話局では、就業開始直後局長による非常召集が発令され、全職員は持ち場を離れて会議室に集合した。

「皆さんもご存知のように時局は重大な局面を迎えております。」上田局長は眼鏡を外してハンカチで顔を拭く。半白の坊主頭から額にかけて汗が流れ落ちた。上田局長の言葉はシゲの心に燻っていた不安を増幅させた。現在どのような局面にあるか、シゲでも知っている。8月6日に広島に原爆が投下され、9日には日ソ不可侵条約を一方的に廃棄して、ソ連軍が樺太の国境を越えて南下して来ている。8月15日の玉音放送が戦争の終結を告げたにも拘らず、ソ連軍の攻撃は激しさを増していたのだ。数週間うちに、ソ連軍はこの真岡市にも殺到するだろう。それまでに日本軍が体勢を立て直して反撃する事が出来るのだろうか？ 隣にいる高石ミキが汗ばんだ手でシゲの手を握り締めた。ミキとシゲは同期に真岡電話局に奉職して9年と4ヶ月になり、独身の交換手の中では、共に最年長であった。局長を見ると、次の言葉を躊躇うかのように顔が歪んでいた。

「陸軍からの緊急連絡によると、ソ連艦隊が真岡沖に結集しています。まもなく艦砲射撃が始まり、ソ連陸戦隊が上陸してくるでしょう。これに対する陸軍樺太方面司令官からの命令を伝達します。」皆は顔を見合わせた。ソ連軍による真岡市の直接攻撃は予想しないことであった。戦争はすでに終結しており、地上戦もソ連軍が攻撃を中止することに微かな望みを繋いでいたのだ。真岡市には樺太駐在の守備隊が結集し、最後の防衛線を張っているが、その貧弱な装備ではソ連軍を食い止めるのは不可能だと思われた。局長はもう一度眼鏡を外して汗を拭いた。

「この真岡電話局は、樺太における最後の連絡拠点であり、今後の作戦を遂行するうえで、その機能を停止することはできません。」局長は並んでいる電話交換手の顔に目を移し、シゲとミキのところで視線を止めた。

「決死隊を募り、最後までこの電話局の業務を死守せよ、との命令です。」50数名の電話交換手は呆然として局長の顔を見つめた。

「この任務を遂行するには15名は必要でしょう。15名の交換手を残して他の職員は直ちに退去して戴きます。お国のために死ぬ覚悟のある方は、一步前に出てください。」局長は声を震わせて言うと俯いてしまった。

15人の決死隊、それは15人に死ぬということである。声は無く誰も動かない。局全体が氷に閉ざされたようだった。夏の盛りとはいえ樺太の気温はそう高くない、局長は額から首に流れ落ちる汗を拭いている。

「皆さんにこのようなことを申すのは心苦しい、しかしこれは軍の命令です。」局長は直立不動で言葉を続けた。

「軍の命令は、天皇陛下の命令です。天皇陛下の御為に命を捧げるのは、日本国民の義務であります。」しばらく沈黙が続いた。シゲには全職員の鼓動が聞こえるような気がした。

「南方では幾多の若者が神風特攻隊員として、自ら死地に赴いています。沖縄ではひめゆり部隊が・・・」局長の声がか細く消える。シゲの頭の中は真っ白になった。皆は息をすることさえやめて、自分の存在を隠そうとしているようですらあった。その時であった。シゲはミキの手が大きく震えるのを感じた。シゲの手を振りほどくようにして、ミキが一步前を出た。

「局長、私が残ります。」ミキは昂然と顔を上げた。

「死ぬ覚悟が必要ですよ。」

「分かっています。」ミキは力強く言った。シゲの鼓動が早くなった。ミキは死ぬ覚悟で志願した。何れにしても15人は死ななければならない。自分がその15人から外れることができるだろうか、ミキだけを死なせて良いのだろうか、シゲの背筋に汗が流れ、鳥肌が生じた。激しい動悸が突き上げ、足が震える。気がついた時、シゲも一步前に踏み出していた。ふと今朝別れたばかりの母親の顔が脳裏に浮かんだ。

「ほかに志願者は？」

局長が尋ねるとあちこちから声が起った。

「シゲさんが残るなら私も残ります。」松橋ミドリが泣きながらシゲの横に並んだ。

「ミドリさん、アンタはまだ若い、残っては駄目。」シゲはミドリを後ろへ押し戻そうとした。

「私もシゲさんと一緒に死ぬ。」ミドリだけでなく、泣きながら次々と志願者が前に出て15名が揃った。

局長はもう一度最終意思を確認した。この局舎がソ連兵に占拠されたとき、彼らの陵辱を受けるか、はたまた自ら死をもって純潔を守るか、それは自身が決めることである。自決するときの毒薬が配られた。

「皆さんは国を護るための尊い礎です。どうか最後まで任務を全うしてください。」局長の言葉はシゲの耳を素通りした。(この文章は大丘忍の原作を編集しなおしたものです)

= 以下次号へ続く =